

序 言

中国社会科学院考古研究所と奈良国立文化財研究所（現 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）は、1991年に「日本古代都城と中国都城の考古学的比較研究」に関する友好共同研究議定書を作成して署名し、これにもとづいて、中国古代都城における共同発掘調査を漢長安城桂宮でおこなうことを1997年に決定した。

両研究所は、中華人民共和国国家文物局に対して、漢長安城桂宮の日中共同考古学調査・発掘計画を申請し、国家文物局は、国务院の特別許可を経て、「中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所が中国において共同で発掘調査をおこなう協議書」を批准した。これをうけて、両研究所は日中連合考古隊を組織し、中国側の責任者を劉慶柱、日本側の責任者を町田章、実行責任者を李毓芳とした。

漢長安城桂宮の共同発掘調査は、1997年11月から2001年5月まで実施した。この間、発掘調査と並行して、発掘資料の整理と報告書の執筆を開始した。劉慶柱・町田章と李毓芳は、共同で桂宮の発掘調査計画と研究課題の草案を作成し、李毓芳が現地におけるすべての発掘調査の指揮をとった。漢長安城桂宮の考古学的調査・発掘調査に参加した日中双方の研究員は次のとおりである。

1997年11月～1998年5月（桂宮2号建築南院の発掘調査）

中国側研究員：李毓芳、劉振東、張建鋒、姜波

日本側研究員：小澤毅、箱崎和久、玉田芳英、次山淳

写真撮影：劉振東・馮孝堂（以上中国側）、牛嶋茂（日本側）

1998年10月～1999年4月（桂宮2号建築北院の発掘調査）

中国側研究員：李毓芳、劉振東、張建鋒

日本側研究員：玉田芳英、平澤毅、清野孝之、渡辺晃宏、島田敏男、長尾充

写真撮影：劉振東、馮孝堂（以上中国側）、佃幹雄（日本側）

1999年10月～2000年4月（桂宮3号建築の発掘調査）

中国側研究員：李毓芳、劉振東、張建鋒

日本側研究員：深澤芳樹、西山和宏、小澤毅、山下信一郎

写真撮影：劉振東、何歳利、李振遠（以上中国側）、牛嶋茂（日本側）

2000年10月～2001年5月（桂宮4号建築の発掘調査）

中国側研究員：李毓芳、張建鋒

日本側研究員：小澤毅、吉川聡、清水重敦、蓮沼麻衣子、石橋茂登

写真撮影：張建鋒、李毓芳、何歳利、李振遠（以上中国側）、中村一郎（日本側）

上記のほかに、本事業の発掘調査をつうじて、漢長安城考古隊技術員の林玉学、呉新年、董慧傑、王志龍らが参加した。

桂宮の発掘調査成果については、日中連合考古隊による速報として、「漢長安城桂宮二号建築遺址発掘簡報」（『考古』1999年第1期）、「漢長安城桂宮二号建築遺址B区発掘簡報」（『考古』2000年第1期）、「漢長安城桂宮三号建築遺址発掘簡報」（『考古』2001年第1期）、「漢長安城桂宮四号建築遺址発掘簡報」（『考古』2002年第1期）の4編の概報を発表した。また、日本側も、これらの発掘調査成果について日本語で発表している。そのうち主要なものは「漢長安城桂宮2号宮殿の調査」（『奈良国立文化財研究所年報1998-I』）、「漢長安城桂宮2号建築B区の調査」（『奈良国立文化財研究所年報1999-I』）、「漢長安城桂宮3号建築の調査」（『奈良国立文化財研究所年報2000-I』）、「漢長安城桂宮4号建築遺跡の調査」（『奈良文化財研究所紀要2001』）である。

桂宮の発掘調査期間中には、中国社会科学院副院長王忍之、秘書長郭永才、中国社会科学院考古研究所副所長張顕清、張国宝、王巍、奈良国立文化財研究所長田中琢、平城宮跡発掘調査部長田辺征夫と工楽善通、浅川滋男らが発掘現場の視察に訪れた。このほか、中華人民共和国国家文物局長張文彬と副局長鄭欣淼、張柏、文物保護司長楊志軍、博物館司長孟憲民、文物保護司副司長晋鴻遠、国家文物局考古專家組長黃景略、組員張忠培、陝西省文物局長張廷皓、副局長劉雲輝、文物処長周魁英、西安市市委書記崔林涛、西安市文物局長李天順、副局長向德、李穎科、文物処長黃偉が発掘現場を訪れた。

桂宮の日中共同調査は、陝西省、西安市、未央区、六村堡郷などの各政府および文物、文化行政管理部門の支持を得て実施することができた。また、発掘調査の全期間を通じて、漢長安城遺址保管所長甘洪更と保管所全所員のご協力を賜った。

漢長安城は、1961年に中華人民共和国国務院が公布した第1回の全国重点文物保護単位であり、今回の桂宮の日中共同調査は、中国政府が批准し、重点文物保護単位でおこなわれた初めての外国との共同発掘調査でもある。そのため、本事業は、当初から社会やメディアの関心を集め、1997年春には、中国社会科学院が北京で日中共同発掘調査についての記者発表をおこなった。これ以降、新華社通信や『人民日報』、『光明日報』、『中国日報』（英文版）、中央テレビなどの中国主要メディアが報道し、海外の多くの新聞・雑誌も調査に関するニュースを報じている。また、1998年、1999年、2000年、2002年には、日中両国の研究者が奈良において漢長安城桂宮の日中共同発掘調査についての記者発表、学術報告会をおこない、日本の多数のメディアがこれを報じた。さらに、漢長安城の日中共同発掘調査で得られた重要な成果を広く公表し、一衣帯水の日中両国における文化交流の悠久の歴史を振り返るべく、中国社会科学院考古研究所と奈良国立文化財研究所、読売新聞社は、1999年4月13日～11月28日に日本で『よみがえる漢王朝』文物展を開催している。

2001年5月に桂宮の発掘調査が終了すると、日中連合考古隊は、ただちに桂宮の発掘資料の本格的な整理と報告書の執筆・編集に取りかかった。

中国科学院考古研究所は、1956年に漢長安城の考古学的調査、ボーリング探査、発掘調査を開始し、1950年代末から1960年初頭にかけて、漢長安城考古隊が桂宮で基礎的な考古学的調査やボーリング探査を実施している。その後、1990年代中頃には、再び桂宮でボーリング探査や試掘調査を展開し、2001年まで継続した。また、並行して桂宮の城壁と宮門、宮内道路、排水渠、大型建築の基壇などの発掘調査をおこなった。これらの調査によって、桂宮の構造や配置が全体的かつ詳細に認識されることとなった。

本報告(報告編)は、劉慶柱、町田章、李毓芳が主体となって編集した。編集責任者は劉慶柱、副責任者は李毓芳、執筆分担は次のとおりである。

序 言	劉慶柱・李毓芳
第I章	劉振東
第II章 第1・2・4節	李毓芳
第3節	劉振東
第III章 第1・4節	李毓芳
第2節	張建鋒
第3節	李毓芳・張建鋒
第IV章 第1・3節	李毓芳
第2節	張建鋒
結 語	劉慶柱・町田章

報告文の入力とレイアウトは張建鋒が担当し、申雲艷の協力を得た。図面の作成は董慧傑が担当し、図版は劉振東と董慧傑が担当した。実測図・拓本・図版のレイアウトは李毓芳と張建鋒、図表は張建鋒が担当した。また、中国社会科学院考古研究所の科学技術考古センターが、桂宮から出土した動物遺存体、プラント・オパール、花粉、木炭、漆喰、金属滓などの鑑定・化学検査・分析をおこない、袁靖、趙志軍、齊烏雲、王樹芝、王増林、劉煜らがそれぞれ成果報告を執筆している。そして、劉慶柱と李毓芳が全原稿の統括をおこなった。

こうして刊行した『漢長安城桂宮 1996—2001年考古発掘報告』は、中国社会科学院の重要課題の一つであり、作成にあたっては同院の多大な支持を得た。

漢長安城桂宮の発掘状況に関して、過去に発表した概報や報道の中で本報告と矛盾する点は、すべて本報告をもって正式見解とする。

本報告の編集の体裁は以下のとおりである。

- (1) 本文で引用した文献は、初出時にかぎり、出版社と出版年月日を示した。
- (2) 瓦当の型式分類は『漢長安城未央宮 1980～1989年考古発掘報告』に準拠し、いくつかの型式・亜式・式を追加した。その他の遺物は、本報告内で型式分類を統一した。
- (3) 挿図のおもな凡例は以下のとおりである。挿図ごとに改めて表示することはしない。

凡 例			
—————	発掘部分	●	礎石
- - - - -	ボーリング探査部分	□	石板
- - - - -	復元部分	■	焼土
.....	地下部分		